

「税金がつくる命と未来」

長与町立長与中学校3年 中村 有佑

私は医療と税金の関係について、日ごろから考えることがあります。なぜなら、私の父は病院で働く医師であり、毎日たくさんの患者さんと向き合っているからです。父は放射線科の治療医として、がんの治療に関わる仕事をしています。大きな病気と闘う患者さんの命を支えるその姿を見て、私は医療という仕事にとっても大きな意味を感じています。

そして、同時に、医療を受けることがどれほどありがたいことなのか、少しずつ理解できるようになってきました。

日本では、病院で保険証を見せれば、治療費の多くを国や自治体が負担してくれます。

これは「国民皆保険制度」と呼ばれるもので、日本に住むすべての人が医療保険に加入し、病気やけがのときに平等に医療を受けられるようにする仕組みです。医療費の自己負担は原則三割で、残りの七割は保険と税金でまかなわれています。これにより、誰もが安心して病院にかかることができます。

さらに、私たちのような子どもには、「こども福祉医療費助成制度」という制度もあります。自治体によって違いはありますが、多くの場合、子どもが病院にかかるときの医療費が無料、またはごくわずかで済むのです。

私もよく風邪をひいたり、怪我をしたりして病院に行きましたが、いつもお金の心配をせずに診てもらうことができました。

父から聞いた話で、特に印象に残っていることがあります。それは、あるがん患者さんの治療についてです。その患者さんは長い間の治療が必要でしたが、経済的な理由で通院をためらっていたそうです。しかし、医療費の負担を軽くする制度があったおかげで、治療を最後まで受けることができたといいます。

「税金と医療制度があるからこそ、患者さんは希望を持って治療に向き合えたんだ。」

と父は話していました。

私はこの話を聞いて思いました。もし税金がなければ、医療費はすべて自分で払わなければならない、治療を受けたくても受けられない人が出てきてしまいます。命に関わる大切なことなのに、「お金があるかどうか」で左右されてしまう社会は、とても怖いと思います。

「医療はチームで成り立っている。医師や看護師だけではなく、それを支える税金や保険の制度があるからこそ、医療を受けられるんだ。」

と父は話してくれました。私はこの言葉を聞いて、税金を納めるということは、ただの義務ではなく、誰かの命や未来を支える大切な行動なのだと実感しました。

これから私は成長し、社会の一員として働くようになります。そのときには、税金をきちんと納め、今度は自分が誰かを支える立場になりたいと思います。そして、すべての人が安心して治療を受けられる社会を、未来へつなげていけるような大人になりたいです。